



覗く眼

第12回

八代によると“マルタ”とはつまり、人体実験をおこなうための人々らしい。あの川べりで細かく刻まれ殺されていた男もその一人で、これまでも何人もが包帯の男の殺傷能力のテストとして、この屋敷内や村の各所で殺されてきたようだ。

八代の恐ろしい告白を呆然と聞きながら、源治は牢の中の哀れな“マルタ”たちに目を向ける。男も女も身なりこそ汚かったが、血色はさほど悪く無いようだ。推察するにこれは実験、つまり包帯の男が殺す時に栄養失調や体力の落ちた連中を殺しても意味がないからだろう。身なりはいつでも良いが、実験動物の活きの良さは必要、という事だろう。

「こいつら、やっぱり中国人や朝鮮人か？」

源治の声が耳に入ったのだろう。牢の中が、ざわつく。包帯の男の眼に怯えてか、聞き取りにくい声だったが（違う）（助けてくれ）という日本語が、源治の耳へと聞こえてくる。まるでそれは、自分たちの存在証明を必死に訴えているようだ。

「違いますよ」

八代は笑った。

「先ほども申し上げたように、今は戦争中じゃありません。他所の国の人間など使ったら、大問題ですよ。日本人です」

「アカ、でもとっ捕まえてきてるのか？」

八代は首を振りながら答えた。

「さあ、中には混じってるかもしれませんが・・・大内さん、家出や蒸発が増えてきているのは、ご存知ですね」

「ああ」

「あなたがた警察が解決できていないものも、たくさんある」

「まさかお前らが、さらってやがるのか」

「とんでもない」

八代は源治の怒りを遮るように、首を振る。

「家出して帰る場所もない。やりたい事も無い。夢が無い、希望がない・・・そんな連中が今の日本にはゴロゴロいます。その連中を連れてくるのは、さらった事にはならないでしょう」

「ふん、もっともらしい言い訳だな」

もとより八代の方は言い訳のつもりなどは少しもないらしく、悪びれる事無く続ける。

「戦争によって死ぬ事もない、けれどもベビーブームなどの影響で人の数は増えた。“余計者”が今の世の中には、たくさんいるんですよ」

源治が牢の中に目をやっても、そこから怒りなどは感じられなかった。おそらく自分たちが余計者と罵られる事よりも、この絶望的な場から何としてでも逃れたい。そんな風に心がすっかり弱ってしまっているのだろう。

「しかし、刑事の前で大胆なものを見せてくれるじゃねえか」

言葉とは裏腹に、今の源治には解決の策など皆無だ。この言葉はただ自尊心から出た、虚勢にすぎない。

「それで今回の俺みたいにお前らのバックが警察に手を回して、こいつらの捜索も無しって事にするのかい？」

八代は首を振った。

「とんでもない。警察もお暇ではないでしょう。捜査願いが出てもしばらく目処が立たなかったら、探すのは打ち切りですよ」

源治はこんな危機的状況の中でも、同僚と今の警察組織への苛立ちが沸く。完璧などはない。けれども今の警察が全力を尽くしての結果には、到底思えない。八代が続ける。

「それにそもそも、捜査願いが出されない場合も多い」

それは源治もわかっていた。警察だけでなく、日本そのものが壊れ始めているのかもしれない。

「そんな事は、わかってるよ」

源治は苛立ちを露わにした。

「これはこれは、失礼」

八代もまた、皮肉たっぷりに応酬する。

「あの警官、いやこの村の連中は、この事をどのくらい知ってるんだい？」

「だいたい事は知っていますよ」

八代は事もなげに答える。

「そうかい。しかしこんな殺人鬼がすぐ傍に居りゃ、不安で堪らないだろうな」

「大内さん、こいつは殺人鬼なんかじゃありません。命令を忠実に実行するだけです。逆に言えばそれ以外の事は決してしない。村人は、わかっていますよ」

「と言う事は、何か？ この村すべてが買収されてるってのか」

薄々感じていた事だが、言葉にしてみると源治自身も事の大きさを実感し、寒気がする。

「買収、という言い方が適切かどうかはわかりませんが、この村の住人の生活は一生保証されています」

「この化け者の研究をする事を、黙認する代わりにか。しかしわからないな。もっと人の居ない所でやりゃ、俺みたいなのも嗅ぎ付かねえだろうに」

「逆ですよ」

源治はその時、八代の目の奥に言い知れぬ恐怖を感じた。何故だかはわからない。もしかすると、いよいよ本当の闇が語られる前触れかもしれない……。

「木を隠すなら森、です。こんな寂れた村だから、誰も見向きもしない。まさかこんな辺鄙な所で大切な研究がされているなんて、夢にも思わない」

もっともな事だ。源治にしても、あの殺人事件が無ければ一生知る事がない村だっただろう。

「ひとつの村を買収できるほどの権力を持っている・・・一体お前らのバックには、どんな奴らが居やがる？」

源治は改めて問い返す。やはり八代は、答えない。かと言って追い詰められてもいない。これは、挑戦だ。そう源治は悟った。

「へっ、当ててみろってか」

八代の薄ら笑いは、答えの代わりだろうか。

「大臣クラスから上の人間が絡んでいるのは、間違いないな。このあたりに縁が深い人間という・・・」

「大内さん」

八代が、遮った。

「無駄な考えを省くために、教えてあげましょう。このような研究施設は、日本各地に数十か所あります」

「こんな化け物がいる所が、まだそんなにもあるってのか」

源治の驚きなど気にする風でもなく、八代は続ける。

「研究内容はそれぞれです。先ほど申し上げましたでしょう。生物兵器、毒ガス、原子爆弾・・・」

源治はさっきと同じく、信じられない気もしたが、すぐに思い直す事にした。これほどの現実を見せられた後だ。考え方は変えねばならないだろう。

「まさか、日本政府そのものの政策じゃないだろうな」

八代は何も答えないし、少しも動かない。ただその笑みが、少し大きくなったように源治には感じられる。

「そうなのか？」

やはり八代からは、何も返ってはこない。

「こりゃとんでもねえ、国民への裏切り行為だぜ・・・」

「大内さん。勘違いしないでくださいよ」

ここで八代の口が、ようやく開いた。

「確かにこの研究や施設の存在に関しては、日本政府も承知しています。けれども、彼らが動かしている訳ではありませんよ」

「じゃあ誰だって言うんだ？」

源治は興奮を懸命に抑えながら、問う。

「およしなさい。知ったって、無駄な事です」

「冗談じゃねえぜ。これは国の犯罪だ。絶対に許さねえ」

八代は諭すように続ける。

「大内さん。犯罪とは法を犯すことでしょうか？ だったらこれは犯罪にはならない。なぜなら絶対的な権力者の命でやってる事ですから」

「絶対的な権力者だって？ はん。まさか天皇陛下の命令だとでも言うんじゃねえだろうな」
八代は何も答えない。

「時代錯誤も甚だしいぜ。もう、時代は変わったんだ」

「その通り」

八代は突然、源治が身を固くするほどキツパリとした口調で言い切った。

「そうです。時代はもう変わったのです。日本が戦争に負けた事によってね」

八代の声の調子は、同じだった。けれども源治の胸に、言い知れぬ棘のようにその言葉は突き刺さってきた。

（日本が戦争に負けた。日本が戦争に負けた・・・）

その言葉は何度も心の中で繰り返されていき、やがて小さな棘は、大木のようになり、源治の心を貫くどころか、押し潰そうとしている。